

寂護の外境批判について

菅 沼 晃

『攝眞實論』Tattvasaṃgrahaの『外境の批判』Bahira-chaparikṣaという章において、内外の種々な有外境説を批判するシャーンタラクシタ Santarakṣitaの立場は、いわゆる唯識派 Vijñānavādinの二つに属するものである、ということはよく知られているところである。また、かれの外境批判論は、内容的には、この章の前の部分を占める極微論に關するものと、それ以後の約三分の二を費している識論そのものにかかわる部分とに大別されうるということも、すでに述べたとおりである。しかし、その際には、この章でなされる極微論の批判は、シャーンタラクシタの独自の立場を示しつつも、基本的には、唯識派本來のいわば極微論批判の一定型となつている世親の『唯識二十論』、および陳那の『觀所緣論』における所説と親しい關係にあるものであるということについては、詳論することができなかつたので、ここでは、シャーンタラクシタの極微外境説批判を、とくに右の二論との關係において考察することにする。

そこで、この章の所論を検討するに先立つて、瑜伽行派における極微破析論の展開について見ると、その原本的な、また一般的な形態は、『唯識二十論』における所説であるといわれる。すなわち、同論第十一偈では、

『彼れ一なるときにも境にあらず。また極微の多數がありて、非一・多なるときにも爾らず。またそれらが積聚せるときにも爾らず。極微は成就せざるを以てなり』⁽¹⁾

と述べ、有外境論者が識の境を極微であると主張する場合に、ただ三のみの宗 Pakṣaが立てられ、その三宗とも不成であるといわれる。この中の第一宗としては、長行で『勝論の人々が分別する有分色の如く』といわれるように、分and-yavaとは別に塵物 sthūlaである實體が存するとするヴァイシエーシカ Vaiśeṣika等の主張があげられている。したがつて、極微論としては、それが單一で外境となつているという第二宗、および、その和合が外境となつているという第三宗の、二つの宗——第二宗は有外境論者としての説一切有

部 Sarvastivādin、第三宗は經量部 Sautrāntika の所説であるといわれる⁽⁶⁾が立てられるのである。『觀所緣論』においても、同様に第一宗として、極微が單一で所緣たる外境となつてゐるという場合があげられ、この二宗は『唯識二十論』における第二宗・第三宗とまつたく一致する。しかし、この論では、さらにこれを補なうものとして、

『一切物は多くの形相を有するものなるが故に、その中の或る形相によりて（それらのものが）現量性として認許せらる。諸極微にもまた和集として顯現する知の生起する因の體あるなり』

という極微の和合相 saṃghāta-ākāra にもとづく第三宗があげられている。このようにして、唯識派の傳統としては、『唯識二十論』の第一宗は別として、その第二・三宗が本來的なものであり、それに『觀所緣論』の第三宗が加えられたと見るのが普通である。

さて、ここで検討しようとする『外境批判』の章においてなされる極微論批判は、右に見てきたような唯識派の傳統的な所説とどういう關係にあるのか。まず、シャーンタラクシタは、敵者の『もし智 (jñāna, ses-pa) を離れて四大 (dūṭa-catusṭaya, hbyunḥa bshi) は存しないとするれば、⁽⁷⁾もしその四大が明確に明瞭に顯現しているのか。それらがそのように顯現しているとしても、（それらが）實在性のないもの (nastitā, med-pa-nid) であると認めるならば、汝には、心

が存在するといふこと (cittasya astitva, sems ni yod-pa-nid) に⁽⁸⁾いつのふかなる認識根據 (pramāṇa, tshad-ma) があるのか』という有外境論に對して、次のような宗 pakṣa を立てている。

『もし（極微が）外境として顯われているとすれば、それ自體はどのようにして明らかになるのか。(一)極微の自性 (paramāṇu-svabhāva, rduḥ-phan ran-bshin) と⁽⁹⁾つか。ある⁽¹⁰⁾は、(二)有分の相 (avayavi-lakṣaṇa, yan-lag-can mtshan-nid) と⁽¹¹⁾つか』

カマラシーラ Kamalaśīla の註によれば、もし外境が現量によつて成立するものであるとすれば、それは、(一)極微自體と異なつたものではない nānyah paramāṇutah 場合、すなわち、極微そのものであるか、(二)それらの諸極微によつて造られた有分なる範物 avayavisthūta であるか、あるいは、(三)それらの諸極微によつて造られたのではないものであるか、という三つの宗 pakṣa しか立てられない。この中の、それらの諸極微によつて造られたのではないものというのは、それ以上に説明されていないけれども、『唯識二十論』における第一宗で云われた分 avayava とは別である一個物が外境となつてゐる場合と對比されるものであると考えられる。したがつて、極微批判論としては、ここでも第一・二宗が問題となるであらう。まず、第一宗について見ると、極微自體が外境として顯われているといわれる宗であるから、『唯識二十

論』の第二宗、『觀所緣論』の第一宗と、全く同一の内容を示すものであることが理解される。シャーンタラクシタはこの宗を批判して、

『まず、（第一の場合においては）極微の行相（ākara, rnam-pa）は認められない。なぜなら、多くの無方分（nirāmśa, cha-med）の極微である物體（mūṛta, lus-can）は、識（pratyaya 觀念・ses-pa 智）の中には顯われない（apratibhasana, mi-shan）からである。もし諸の極微が認められるとすれば、分の區別を缺くもの（vyapetabhagabheda, chags-dbye-ba dai bral-ba）となるであろう。そうでないとしたら、それらは認められないであろう。自體の行相（ātmākāra, ran gi rnam-pa）は認められないからである』⁽³⁷⁾

と云う。この批判論は、基本的には、『唯識二十論』の『非一にも非ず。諸極微の一には、（境性の）領取せらるるものなきを以てなり』という主張に基づき、さらに、『觀所緣論』第一偈およびその長行の、『根による了別の因は極微ならんも彼として顯現せざるが故に、彼の境は極微にあらず。根の如し。（第一偈）所以は、境と名づけらるるは、知によりて自體の決了せらるることなればなり。その形相の如く生ずるが故なり。然るに諸極微はそれの因性たり得んも、而もかくの如くにはあらず。根の如し。かくの如くなれば諸極微は所緣にあらず』⁽³⁸⁾という所説で全く明らかにされるような主

張の上に立つものである。陳那によれば、識があるものの自相にしたがつて作用し、そのものに識を生起させる働きがある場合に、それが所緣々たる境といわれるのである。ところで、極微は識を生起させる因性ではあるが、しかし行相としてその中に顯われているものではない。たとえば五根について見ると、それには識を生起する作用はあるけれども、識はその五根を對境として了別することはないから、それは境の行相をもつものではない。同様にして、極微もたとえ外境として識を起す作用をもつているとしても、それ自體の行相は識の中に顯われないのであるから、外境として成立することはできない。シャーンタラクシタが有外境論の第一宗を批判して、「極微の行相は認められない。……識の中に顯われないから」と述べたのは、まさに、このような立場を承けていると考えられる。このことは、カマラシーラによつて、「現量と主張される識において、それ自身の行相をもつて顯われないものはない、すべて現量性 Pratyakṣatva として認許されるべきではない。たとえば空華のごとし。そして、能なる行相 śūṇya-ākāra を取つてゐる極微は、現量と主張される識の中に顯われていない。それゆえに能遍不可得 vyāpakānupalabdhi である」という主旨の論式にまとめられている。

『外境批判』の章における有外境論の第二宗は、シャーンタラクシタによつて「有分の相のもの」である場合といわれ、

カマラシーラによつて『それらの諸極微によつて造られた有分なる塵物』である場合であると註記されるものであつた。註釋者は、さらに、この第二宗について、諸極微はただ集合した、*saṃudita* 場合にのみ生じ滅するということが成立するのであつて、その一々が識の中に顯われるのではないという場合であると述べ、尊者シュバグプタ *Bhadrata Subhag-upta* の説として、『諸極微は一つ一つ獨立して存するのではない。それ故に（識の中においても）諸極微が一つ一つ顯われるのではない』⁽¹⁷⁾ という偈文をあげている。このような、極微は一々としてではなくて集合した形で存し、われわれは、ちやうど同様の刹那が相續することによつて常住という觀念を持つにいたるように、多くの同種の極微の和合したものを一實體と見なすのである、という主張は、シュバグプタの *Bāhyarhasiddhikārikā* という書物の中に説かれるところである⁽¹⁸⁾。これに對して、シャーンタラクシタは、

『たとえ（極微が）集合したもの（*saṃhitya*, *lhan-cig*）として存するとしても、それらはただ自相として（*svarūpena*, *rah-bshin du*）のみ顯われるであらう。なぜなら、たとえ（集合した）状態にあつたとしても、それらはその無方分の特相（*ananyārupatva*, *cha med no-ba-ñid*）を棄てないからである。もし、それらの特相が把えられる最少限のもの（*labdha paçyaparyanta*, *ñgrih-paḥi mthar-thug-pa*）であるとすれば、さうしてそれらは受（*ve-*

danā, *tsor*）等のごとく物體でないもの（*amūrta*, *lus-med*）と⁽¹⁹⁾ならないのか』

という破析を述べている。このような宗は、さきに見たような唯識派の傳統的な有外境論に對する立宗の中の、いずれに近い内容を示しているであらうか。『觀所緣論』における第二宗（すなわち『唯識二十論』における第三宗）では極微和合説が取り上げられ、和合したものは行相とはなり得ても、實體性が存しないから識を能生起する働きが無く、したがつてそれは外境とはなりえないとして破析され、また同論の第三宗の和合の相が外境となるという主張は、第一・二宗にもとづいたものであるとして同様に遮遣されている。したがつて、具體的には右の二宗との關連を考えることになる。さきに註釋者によつてあげられたシュバグプタ説については、それが右の二宗の中の後者に近いものであることが指摘されている⁽²⁰⁾。しかし、シャーンタラクシタ自身の右の二偈によれば、かれの立てた第一宗で「無方分の極微は識の行相とはならない」と指摘したその同じことがこでも述べられ、「集合した」場合においても何ら特殊性は考えられないことが説かれてゐる。しかも、この中の極微の無方分性に關しては、この章では右の一九七〇偈を承けて、一九九〇偈以下で詳細に論じられており、この意味からは、むしろ『唯識二十論』の第十二偈以下に見られる所説に近いものを示していると見

られる。また他方、この章では、第二宗で「有分なる鈍物」と云われたような、有分なる極微↓和合↓鈍物としての行相、と展開する有外境論も検討されている。このことから考えると、この章で立てられている第二宗としては、『觀所緣論』の第二・三宗にまたがるような立場が設定され、批判されていると見られ、このような上記二論に基づいた有外境論二宗の批判を中心に、さらにはスマティ Sumati やタマリラ Kumāṛila の有外境論が検討されるのである。しかし、シャーンタラクシタの極微論批判の特色は、このような唯識派の傳統的な型をふまえているという點にのみあるのではなく、かれの識説、たとえば有相の識・無相の識を批判する立場との関連において見るべきであらうと考えられる。

- 1 山口益博士『般若思想史』一六九—一七四頁、および拙稿“*The Examination of the External Object in the Tatvasaṃgraha*”（『印佛研』第十卷第二號）、「寂護の識論——*Bāhīrthaparīkṣā*, *Tatvasaṃgraha*——」（『東洋大學紀要』第十八集文學部篇）等参照。

- 2 前者に關するは拙稿“*Santaraksita's Criticism on the Pa-rāṇānuvāda in the Tatvasaṃgraha*”（『印佛研』第十二卷第二號）、「後者に關するは“*On the Self-Cognition in the Tatvasaṃgraha*”」（『印佛研』第十一卷第二號）参照。

- 3 山口益博士「唯識の破析する極微説について」（『宗教研究』第二年第四輯、三九五—四〇〇頁）、同博士「佛教における

無と有との對論』四〇七頁参照。

- 4 山口益博士譯、『世親唯識の原典解明』七〇頁。

- 5 同右。

- 6 山口益博士『佛教における無と有との對論』四〇八頁、『佛教學序説』一七六頁による。

- 7 山口益博士譯、前掲、四四七頁。

- 8 註3参照。とくにこの第三宗の所屬については、同博士『世親唯識の原典解明』四五〇頁註1参照。

- 9 この章の用例では、*jāna*, *vijāna*, *pratyaya* は *śiṃ* *ni* *m* に用いられている。このことは他の章でも同様である（中村元博士『初期のヴェーターンタ哲學』三九一頁参照）。

- 10 *Tatvasaṃgraha*. v. 1965~6.

- 11 TS. v. 1967.

- 12 *チキム pratyaya-aprativedanāt tṣ tib. śes la mi snat phyir ཤེས་ལོའ་པ་ pratyā-apratibhāsanāt ཤེས་ལོའ་པ་*

- 13 TS. v. 1968

- 14 山口益博士譯、前掲、七一頁。

- 15 山口益博士譯、前掲、四三三頁。

- 16 *Tatvasaṃgrahapāṇjikā*. p. 551. II. 14~17.

- 17 TSP. p. 551. II. 21~22.

- 18 M. Hattori; “*Bāhyarthasiddhikarika of Śubhagupta*”（『印佛研』第八卷第一號）三九七—三九八頁）による。

- 19 TS. v. 1970~71.

- 20 註8参照。